

図書館員の四季

私のパートナー

兵庫県立尼崎病院 堀江亜由美

病院図書室に勤務して3年が経ちましたが、その間一度も部屋から消えたことのないものがあります。それは段ボール箱の山！

初めて図書室に入ったとき、通る所もないほどに積まれた箱の中には、戻ってきたばかりの製本雑誌がぎっしりと入っていました。見慣れないタイトルとその重さに戸惑いながらも何とか片付け、空いた箱は何かに使えかなと思って、そのままつぶさずに置いておいたのが最初。それらはまず、書庫の整理をしようとしたとき、棚から出した本の仮置き場所と移動手段にとても役に立ちました。

そのすぐ後、次は図書の廃棄を行うことになり、準備のための作業にまたまた空箱が重宝しました。廃棄は、先に利用者に対象図書を展示して、欲しいものを持って帰ってもらった残りを処分するという形をとり、展示ケースとしても段ボールは大活躍でした。

もちろん、年に2回、雑誌を製本に出すときにも使っていますが、これらはまた新しい箱に替わって帰ってきます。

不注意で手や足をよく切ったりしますが、それでも私にとっては効率よく仕事を進めるための、大事なパートナーとなっています。

図書室も、だんだんと整備されつつありますが、まだ行方の定まらない本が多い現状では、彼らに休息はないでしょう。

重い箱を抱えて歩いている様子を利用者に驚きの目で見られながら、時には「腰をいわさんようにしいよ（痛めないようにしなさいよ）」と優しい声もかけてもらったりもして、今日も私は段ボール箱とともに図書室で奮闘しています。

あれこれ6年

高槻赤十字病院 浜口 恵子

図書係専任のはずだった私が、病歴係を兼務するようになって11年になる。

最初の頃は、医者の字が読めなくて苦勞した。何しろ医者字はきたない、読みにくい（ごめんなさい。当院限定かもしれません）。日本語でも読みにくいのに、英語で、しかも筆記体で書かれた日にゃ、私はほとんど暗号解読者である。おまけにスペルが間違っていると、両手を挙げて降参したくなる。だから、いつも辞書を傍らにおき、首っ引きで暗号解読に励んだものである。

診療録管理士の通信教育受講時、医学用語学を学び、医学用語の構造、造語のルール、システムを知って、目から鱗が落ちる思いがしたのを覚えている。その頃から医学用語にかなりの興味を持っていたのだが、病歴を兼務することになって、よりいっそう必要に迫られて、医学用語と向き合うことになった。

それで、辞書を座右の書とするにいたった訳である。暗号解読が進み、慣れてきた頃、自分が学んだものを整理しようと、ちょっとした思いつきとか安易な気持ちで始めたのが“医学用語あれこれ”の連載である。あさはかだった。あれから6年。最初のうちは軽やかだった筆の運びも、今や、重くて一向に進まない。とにかく、何から何まですべて辞書を引き引き、確認して納得してからでないと書けないのである。いつ来るともわからない、編集長からの催促の電話も恐ろしい。

でも、今年になってようやく先に光が見えてきた。あと2回で連載終了の予定である。やっと肩の荷が下ろせそうで、ほっと一息ついている今日この頃である。